TOKYO NOUVELLE VAGUE
FIGARO STORY
1991 PARIS, TOKYO, NEW YORK AN OMNIBUS FILM

東京ヌーベルバーグ

フィガロ・ストーリー

CONTENTS

解説/物語 ―― 2
[パリ篇]ライブラリー・ラヴ[東京篇]月の人[ニューヨーク篇]キープ・イット・フォー・ユアセルフ

車は走り、想いは寄りそう ―― 10
大久保賢一

1950〜60年代の映画と車の幸福な関係 ―― 14
鈴木布美子

パリの妄想、東京の幻想、そしてニューヨークの現実 ―― 18
河原晶子

フィガロ・ストーリーを彩る不思議な妖精たち ―― 20
佐藤友紀

プロダクション・ノート ―― 22

編集◆本多 淳一/堀上 敦/谷島 正之
Editors: JUNICHI HONDA, ATSUSHI HORIGAMI, MASAYUKI TANISHIMA

デザイン◆上野 恭裕
Designer YASUHIRO UENO

発行◆株式会社ヘラルド・エース
Published by ©HERALD ACE, INC.

印刷◆三映印刷株式会社
Printing: SANEI PRINTING CO., LTD.

1991年4月27日発行

『フィガロ・ストーリー』は、「都市」「恋愛」「車」をキーワードに、
いま世界で注目されている3人の若い映像作家たちがその才能を競い合う、
日米仏合作の異色オムニバス映画。
舞台は、パリ、東京、ニューヨーク。
それぞれのパートを、アレハンドロ・アグレスティ、林海象、クレール・ドニが独自の視点から、
街を、男と女をスクリーンに描き出します。

ALLARTS PRESENTS
AN ALLARTS PRODUCTION IN CO-PRODUCTION WITH HERALD ACE INC.

FIGARO STORIES

Executive Producers
MASATO HARA・DENIS WIGMAN・KEES KASANDER

Associate Producers
KAYO YOSHIDA・ROLAND WIGMAN

Producer
KEES KASANDER

Assistant to Producer
DICKY PARLEVLIET

Administration
ANNELIES MEULEMAN・BOUDEWIJN VAN DER DONK

Post Production
MARC THELOSEN

General Assistant
LIZ DE JONG

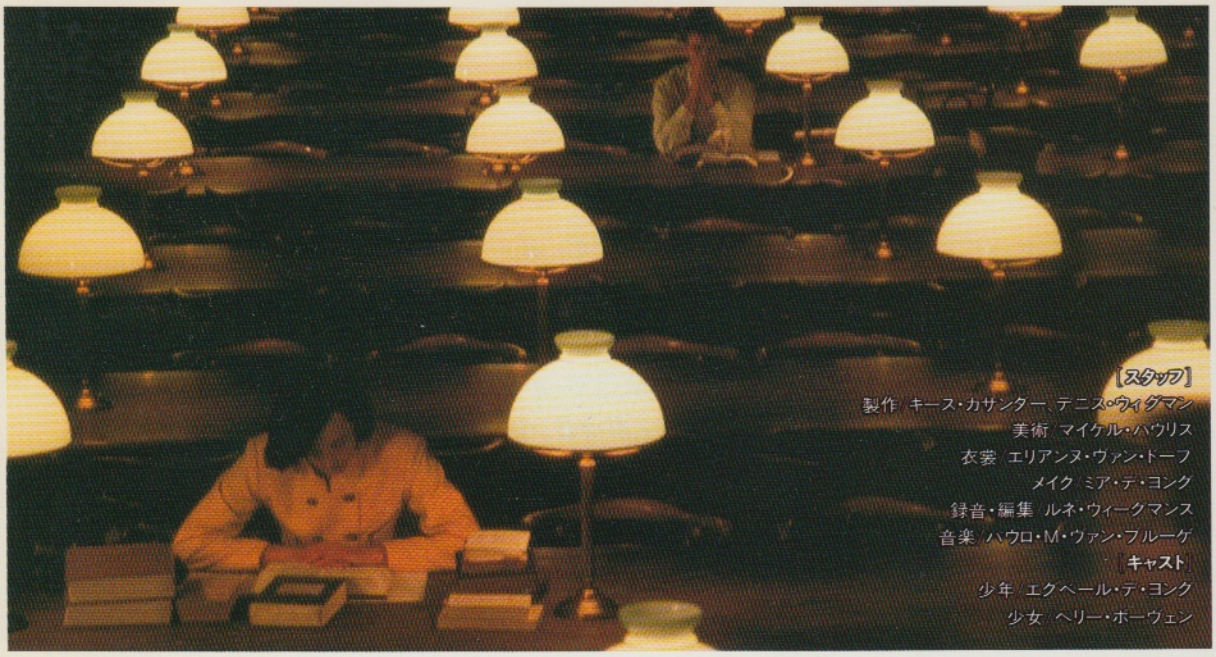
Based on an Idea by HAKUHODO INC.
MAKOTO FUKUJU・HIROSHI AIZAWA・CHIAKI SAITO・AKIRA YANAGISAWA

In Co-Operation with NISSAN MOTOR CO.,LTD.
Distributed by HERALD ACE INC./NIPPON HERALD FILMS, INC.

［パリ篇］

ライブラリー・ラヴ

Allarts Presents"LIBRALY LOVE"Paris



解説

「フィガロ・ストーリー」のパリ篇を監督するのは、アルゼンチン出身で弱冠30歳のアレハンドロ・アグレスティ。

小説家になる夢を抱きつつ、16歳の時カメラマンのアシスタントとして映画製作の世界に飛び込んだ。当初は生活の糧としてしか映画のことを考えていなかったが、やがて映画作家としての野心を抱き、'86年に25歳という若さで長篇監督デビューを果たした。アルゼンチン国内での公開のめどが立たぬまま世界を放浪していた彼に目をつけたのが、プロデューサーのキース・カサンダーである。アグレスティはカサンダーのバックアップで、オランダで映画製作を始め、'87年「ラヴ・イズ・ア・ファット・ウーマン」'89年「シークレット・ウェディング」とたて続けに作品を発表、「ラヴ・イズ～」ではサン・セバスチャン映画祭、トロイア映画祭等に、「シークレット～」ではリオ・デ・ジャネイロ映画祭、仏アミアン映画祭等に招かれて主要な賞を獲得し、一躍世界の注目を集める監督になったのである。そして、第4作目の「ルーバ」(90)は現在ヨーロッパで上映中、日本でも最近公開され、映画狂(シネマニア)たちの間で徐々に人気を広めつつある。

「フィガロ・ストーリー」パリ篇「ライブラリー・ラヴ」はアグレスティの初の短篇作品である。

監督1作目から3作目までが、祖国アルゼンチンの軍政に影響されたシニカルなテーマを扱ってきたのに対し、第4作目と本作ではアグレスティの文学的な嗜好が色濃く表わされてきている。

ドストエフスキー、カフカを愛するアグレスティにとって、本は宝物。秘密めいてサスペンスフルな図書館での恋＝ライブラリー・ラヴは、彼自身の願望なのかも知れない。想像力＝創造力豊かなアグレスティ・ワールドは、観る者の心を離さないだろう。

少年役のエグベール・デ・ヨングは「ルーバ」の制作側のスタッフとして参加していたが、俳優として映画に出演するのは初めてである。少女役のヘリー・ボーヴェンも本作が映画デビュー作となる。また少女の夫役で、「ルーバ」の主役を演じたアルゼンチン出身のエリオ・マルチが出演している。

物語

古びた図書館。広々とした部屋のなかの、端と端に少年と少女がポツンポツンと離れて座っている。

少年は机の上にうず高く本を積み上げ、小説の装丁について思案中だ。彼はここに通う3日間、同じように後ろ向きに座っているあの少女の姿が気がかりである。今日、彼女が図書館を出てどこへ行くのか、尾けてみようと思い立つ。

外で待ち伏せた少年は、愛車を駆って同型の車に乗り込んだ少女を追う。

クロワッサンを買う少女、公園のベンチに座る少女、カフェに入る少女……少年は車の陰にかくれて少女を見つめる。少年は彼女の行動を遂一、小説の描写になぞりカミュ風、ボルヘス風と文体まで考えているようだ。

少年の存在に気づかない少女は、一人でいることの憂鬱をカフェにいる男たちに嫌悪の目を向けることで解消しようとしている。カフェの客たちを見回す彼女の目に、難解そうな本を読むインテリ風でハンサムな男（あの少年だ！）が飛び込んできた。

目と目で牽制しあう二人。

それぞれが頭の中で考えていた気持ちとは裏腹のそっけない会話。

そして2台の車がパリの町を並行して走ってゆく……。

Message from ALEJANDRO AGRESTI

監督・脚本・撮影

アレハンドロ・アグレスティ

私はこの映画を
とても愉しみながら作りました。
映画の主題は「誤解」です。
人生は全て誤解で成り立っているようなものと私は思っています。
人間の持っているこの特性に魅力を感じて、
そのひとつの例としてこの映画を作ったのです。
皆さんも愉しんでご覧いただけることを願っています。

Alejandro Agresti

［東京篇］

月　の　人

Herald Ace Presents"MAN FROM THE MOON"Tokyo

解　　説

「フィガロ・ストーリー」の東京篇を監督するのは、デビュー作「夢見るように眠りたい」(85)等で日本映画界に新風を送り込んだ、いま最も熱い監督、林海象。

京都に生まれ、幼少の時から映画にとりつかれていた林は、大学中退後東京へ赴き映画製作のためのさまざまな準備をしたのち、'86年自らの製作、脚本、監督で16ミリ作品「夢見るように眠りたい」を撮る。サウンド版形式の無声モノクロ(ニュー・サイレント)という形態で、昭和初期のモダニズムとサイレント映画へのオマージュを幻想的に描いたこの作品は、予想を上回る大ヒットとなり新しい才能の台頭として一躍注目を浴びる。第41回毎日映画コンクール・スポニチグランプリ新人賞を受賞したほか、海外においても15の映画祭に招待されるなど世界的にも高く評価された。その後CF、ロックバンド「千年コメッツ」のプロモーションの製作を経て、'88年実相寺昭雄監督作「帝都物語」の脚本を担当。また同年、エスパー清田益章の超能力世界を収めたサイキック・フィルム「φIDEA」を製作する。そして'89年に発表した「二十世紀少年読本」はエジンバラ国際映画祭でチャーリー・チャップリン賞を受賞、名実ともに国際的な地位を確立する。続けて同年、構想から映画化実現まで3年を費した超娯楽時代劇「ZIPANG」を監督、そのアイデアの豊富さ、着眼点の奇抜さは国内外で話題になった。そして、今回の国際合作映画「フィガロ・ストーリー」で遂に世界の土俵に踊り出たのである。

彼は「月の人」についてこう語る。

「東京という街を巨大なオープンセットと考えて、普段見慣れている風景を（映画を通じて）全く別の風景にしてみようと思いました。画面には映っていても、本当の東京のようで本当の東京でない、この世ならざる東京を見せたかったのです」

「月の人」は全篇セリフなし、映像と音楽のみで展開する仕立てとなっている。「映画は人類の共通語」であると考える林は、国際合作映画にふさわしく、世界中の観客の心に直に訴える手法を選んだのである。

主役の〝女〟には、本作で映画デビューを果たした堂野雅子、〝月の人〟には林組には欠かせない中国出身の俳優、修健がそれぞれ演じている。また、大泉滉や佐野史郎など林組おなじみの役者たちが特別出演しているのも見逃せない。

スタッフも林組の常連だ。撮影監督の長田勇市、美術の木村威夫、照明の長田達也、音楽の浦山秀彦と熊谷陽子以下、林監督のねらうファンタジックな映画づくりに大いに貢献している。

物　　語

月面に立つ月の人。

大きな翼を持った月の人が、地球を覗き込み、いま宇宙へ飛ぼうとしている。翼を躍動させ大気圏を突き破って進み、闇を落下していく。

広い部屋にいて窓外をみつめる少女。

彼女の日常は画一的だ。同じ髪型で同じ服装のサラリーマンたちに囲まれて満員電車に乗り、会社では規則正しくキーボードをたたく。

彼女は空を見つめ、高いところを求めて東京タワーに上る。それは幼少期のこと――光りに溢れ音に満ちた世界で、クラウンやシンメトリーといったサーカスの芸人たちにさそわれて行った夢のような出来事。

立派な翼を持った月の人が空中ブランコで現われ、舞台の上にある絵に描かれた月に消えていった。その時から彼女は空を見上げ、去っていった月の人を呼びつづけるようになったのだ。

夜、何かを求めて一心に飛び続ける月の人の陰が見える。

月の人を求めて、彼女は車で東京の町を疾走する。

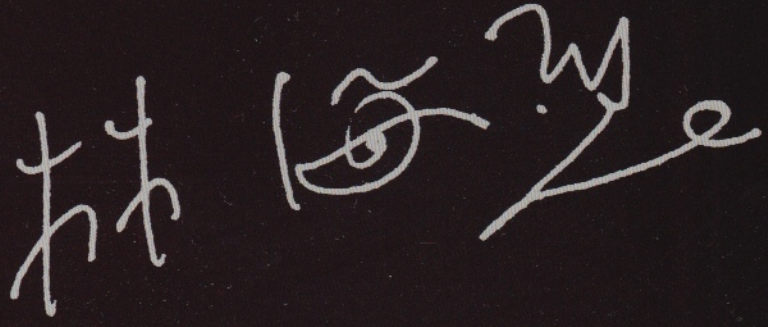
そのとき空から黒い羽が舞い下りてきた…。

Message from KAIZO HAYASHI

監督・脚本

林　海　象

夢と現実は卵の黄味と白味です。
どちらが黄味でどちらが白味かは、いいますまい。
その卵をかきまぜ
スクランブル・エッグにしたものがこの映画です。
塩やコショーをふりかけて、自分の味に仕上げて自由にご覧下さい。



［ニューヨーク篇］

キープ・イット・フォー・ユアセルフ

Good Machine Inc. Presents"KEEP IT FOR YOURSELF"New York

スタッフ
製作／ジェイムス・シェイムス
撮影監督／アニエス・ゴダール
美術／ジャン・ロルフス ベン・ヴァン・オス
衣装／エリザベス・ジェニョン
メイク ジュディ・チン
編集 ドミニク・オーヴレイ
音楽／ジョン・ルーリー
［キャスト］
少年 E.J.ロドリゲス
少女 ソフィー・シモン
女 サリナ・チャン（サラ・ドライヴァー）
隣人 ジム・スターク

解説

「フィガロ・ストーリー」のニューヨーク篇を監督するのは、'88年に「ショコラ」でデビューした女性監督クレール・ドニ。

パリに生まれ、子供時代をアフリカで過ごした彼女は、'71年にパリの映画学校イデックを卒業後、パテ社製の「フランス時報」の短篇の何本かを監督する。'74年以降は助監督となり、ドゥシャン・マカヴェイエフ、ジャック・リヴェット、ジャック・ルーフィオ、さらにはコスタ・ガブラス、ヴィム・ヴェンダース、ジム・ジャームッシュ等の下で働く。この間の経験と人脈づくりが実を結び、デビュー作「ショコラ」を完成させる（フランスを代表する俳優J P・ベルモンドが影ながらドニを応援し、製作に協力したことは有名である）。この映画はドニが少女期に過ごしたアフリカでの思い出を自伝的に記したもので、その甘美でほろ苦い映像は、その年のカンヌ映画祭で大きな話題をさらった。

「フィガロ・ストーリー」ニューヨーク篇「キープ・イット・フォー・ユアセルフ」はドニにとって初のオムニバス作品となった。なお、このパートのみモノクロ作品である。

短篇ながら、一流のスタッフが集った。音楽は、「ストレンジャー・ザン・パラダイス」(84)「パリ、テキサス」(85)等で俳優として活躍し自らのバンド「ラウンジ・リザース」で音楽活動をするほか、アンダーグラウンドで絶大なる人気を博しているジョン・ルーリー。また撮影監督にはサッシャ・ヴィエルニ、アンリ・アルカン等の下でカメラ・オペレーターとして経験を積み、ドニ監督によるドキュメンタリー・フィルムの撮影を担当しているアニエス・ゴダール。美術には「コックと泥棒、その妻と愛人」(89)で見事なセットを作ったベン・ヴァン・オス。

主演は新人のE・J・ロドリゲスとソフィー・シモン。脇役としてジャームッシュの公私にわたるパートナーで、「ユー・アー・ノット・アイ」(81)「スリープ・ウォーク」(86)等の監督作も手がけるサラ・ドライヴァーが、サリナ・チャンなる芸名で主人公の少女を助ける女性の役で登場する。

物語

真冬のニューヨーク、空港。

フランスからやって来た女性がひとり。ボーイッシュな風貌の彼女は、初めてのアメリカ旅行のため少々緊張気味だ。彼女は去年の夏、フランスの避暑地で知りあったある男を訪ねてやって来たのだ。

不案内な街でやっとのことマンハッタン行きのバスに乗り込み、彼の住むアパートまでやって来たが、あいにく留守のようだ。彼の手紙を見つけ、早速それを読んでみる。今は所用で遠くにいるためすぐには帰ってこれないとのことだった。手紙のメモにあったように、管理人から鍵を借り、男の部屋に入ってみる。

家具もない、窓にはカーテンもないガランとした寒々しい部屋で一人寝転び、電話の前で待つ少女。幾つかの夜と幾つかの朝が過ぎ何人かの奇妙な人々と出会う。

夜の暗がりの中、モータープール。

トレーラーに積まれた60年代風の車に忍びよる男がいた。料金所にいた少年を銃で脅し、その車を盗んで運転させ街へ繰り出した。男は闇のブローカーに車を売って金をせしめようとするが、目立ちすぎていて買えないとあえなく断わられる。怒った男に、車を処分してこいと命ぜられた少年は、夜の街を徘徊するが、そうこうするうちにパトカーに追われるはめに陥るのだった。あわてて車を乗り捨てると、手当たり次第にアパートのドアを叩いて回る。ドアが開いた。そこはあの少女の部屋だ。見知らぬ少年の訪問にビックリした彼女と押し問答の末、少年は遂に部屋へと潜り込む。

パトカーが去り、少女の興奮も納まった頃ガランとした空間の中でお互いが孤独であることを徐々に知り始めるのだった……。

Message from CLAIRE DENIS

監督・脚本

クレール・ドニ

私はラヴ・ストーリーを撮りたいと思っていました。
人生で何も永遠なものはない、
愛も永遠のものではありません。
しかし、映画の中では、
手に取って見ることができないはずの"愛"を見せることが
できるのです。
私はヌーベルバーグを想起させるモノクロームと
ソフィーの魅力を借りて、
私なりのラヴ・ストーリーを作ったのです。

Claire Denis

LIBRARY LOVE

CAST:Boy EGBERT DE JONG/Girl GERIE BOVEN/Girl's Husband ELIO MARCHI/Boy's Wife ISABELLA VAN ROOY/Man in Café JAN SEPERS/Woman in Café DIANE HINDRIKS
CREW:Director ALEJANDRO AGRESTI/Production ANNEMIEK VAN GORP/Production (France) BRIGITTE FAURE, CINEA/Camera ALEJANDRO AGRESTI/Light NESTOR SANZ Art-Director MICHAEL HOWELLS/Wardrobe ELIANNE VAN DORP/Make-Up MIA DE JONG Sound RENE WIEGMANS/Editor RENE WIEGMANS/Music PAUL M. VAN BRUGGE

MAN FROM THE MOON

CAST:MASAKO DONO / XIU JIAN / MEIRAN MAEDA / MASASHI OKUDA / HIDETOSHI FUJIWARA/KATSUKI OKAJIMA/ENAMI OKAJIMA/KOJI OTAKE/YOSHIO ANBO/MAKI ISHIKAWA/SEIGEN NAKAYAMA/TERU URAKAMI/MIKA OMINE/YOSHIAKI ITO/HACHIRO IKA/SHIRO SANO/AKIRA OIZUMI
CREW:Producer YASUSHI TSUGE/Director of Photography YUICHI NAGATA (J.S.C.) Lighting Cameraman/TATSUYA OSADA/Production Designer TAKEO KIMURA/Character & Costume Designer/SACHIKO ITO/Sound Recordist HISAYUKI MIYAMOTO / Editor ISAO TOMITA/Script Continuity KAZUMI MATSUZAWA/Music HIDEHIKO URAYAMA.YOHKO KUMAGAI/Formative Arts MINORU KUZIRAI/ Choreography FAN LU / Music Performed By MEYNA CO.

KEEP IT FOR YOURSELF

CAST:The Girl SOPHIE SIMON/Young Woman SARINA CHAN/Neighbour JIM STARK/ Boyfriend MICHAEL JAMES/Nico EDWIN J. RODRIGUEZ/Cop #1 LENNY DINER/Cop #2 JEFF HOWARD/Cop #3 MICHAEL ORNSTEIN/Tow Truck Guy RICHARD T.BREEN/Gang Members VINCENT GALLO, AUGUSTINE RODRIGUEZ, HECTOR ARIAS/Young Woman's Boyfriend BILL WARE/Passerby MICHAEL RUBINSTEIN
CREW:Director CLAIRE DENIS/Line Producers/JAMES SCHAMUS,TED HOPE / Direction Of Photography AGNES GODARD/Lighting Designer JEAN-CLAUDE BASSELET/Production Designers BEN VAN OS,JAN ROELFS/Art Director MARK FRIEDBURG/Costume Designer ELIZABETH JENYON/Wardrobe Supervisor BARBARA KLAR/Make Up JUDY CHIN/Editor DOMINIQUE AUVRAY

車は走り、想いは寄りそう。

三者三様のオムニバス

●大久保賢一

街を走るバスは、昔の英語では省略せずに〝オムニバス〟と呼ばれていたという。

どんなキャラクターが並んで乗っても構わない〝乗り合い自動車〟がオムニバスだ。

手帖や日記、魔法の眼鏡などが短篇をつないでいくオムニバスもあるが、この〝フィガロ・ストーリー〟で、三人の監督に与えられた条件は、キーワードとしての「都市」「恋愛」、そしてフィガロという車を登場させる、というものだった。

夜の都会をフィガロが走る。その役割は三者三様だ。

パリ篇「ライブラリー・ラヴ」の監督・脚本(そして撮影)のアレハンドロ・アグレスティは、二台のフィガロを走らせる。

図書館の中で、女の後ろ姿を男が見つめるという位置関係から始まるこの物語では、アグレスティが映画をつくる際に最も心を砕くポイントである「カメラの視点」が、男と女の表情を様々に描いていくことになるが、そのカメラの雄弁さにも増して饒舌なのがモノローグだ。

女が男に焦点を合わせるまでのそれぞれのモノローグ、向かい合ってからの、それぞれのイマジネーションの中で相手を評するモノローグ。その饒舌さと、口に出されるダイアローグの圧倒的な凡庸さとの対照がなんともおかしい。

フィガロはこの二人に旋回から直進という動きを一度は演じさせて、最後には女の夫と男のガールフレンドというもう一つのカップルに、煮つまった関係を凡庸に語るしかないダイアローグに別れをつげ、饒舌なモノローグにふけるきっかけを与えることになる。

東京篇「月の人」の監督は林海象。彼はフィガロのデザインから受けた印象を、「この車に巨大な卵をのせて走りたいと思った」と語っている。

ここでは、少女の頃の記憶につき動かされた若い娘が、月の人を求めて夜の街から街の外へとフィガロを疾走させる。

そして、林がこれまでも繰り返してロケ地を画面の上に独特にデザインしてきたように、「この世ならざる風景」(林)が現われることになる。

疾走するのは彼女の想いであり、その想いに引かれるように月の引力から脱してくる「月の人」の動きだ。やみくもともいえる彼の墜落は、彼の位置からは天に向かっての突進だった。

水の中に落ちる巨大な卵のイメージ。水は彼女の内面を表現した部屋の、核心の部分にあり、彼女の外部の乾ききった、強い風の吹き荒れる風景と明瞭な対照をなしているが、月と地球という二つの球体は、互いに引き合いながら、水面に互いの姿を写し出すことで二人に接近をうながすことになる。

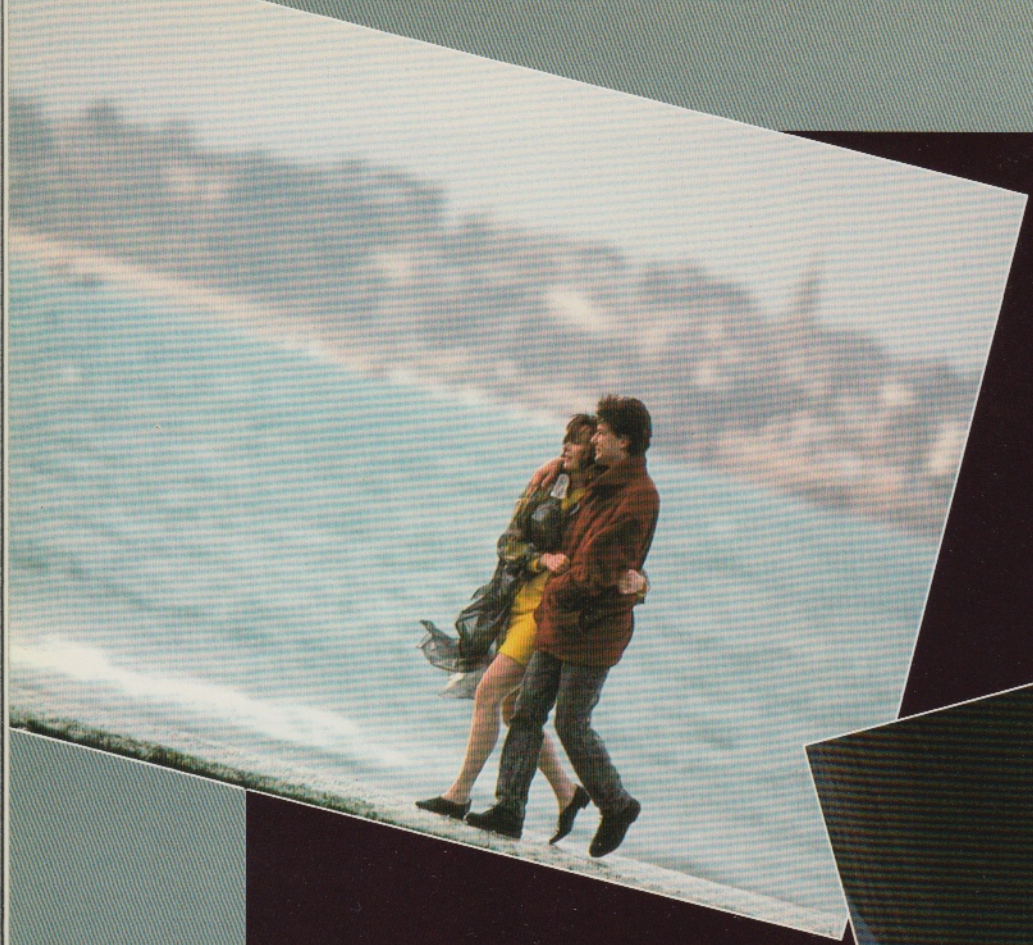
地上に写った影、そして形を写し出す水。自在であり、波だちもする水が写し出す映像が、ここでの「交信」の鍵なのだ。

ニューヨーク篇「キープ・イット・フォー・ユアセルフ」のクレール・ドニ監督は、パリからニューヨークへ少女を向わせる。街への彼女の到着をしめす場面、カメラが眼下の街をながめながら、ゆったりと横へ滑っていく素晴らしい場面は、この少女が一人の天使であることを告げているように見える。

だが彼女は背に羽根もなく、ここでは途方にくれて、街に手を触れ始める天使だ。

『ショコラ』で階級と人種の関係の中で白人少女が一人の黒人に向ける微妙な視線を描いたドニは、この『フィガロ・ストーリー』の前に「孤独な人々の映画を撮り終えたばかりだったので」ここではラヴ・ストーリーを撮りたかったと言う。彼女は、出会った二人がおずおずと手をさしのべあうような、小さな物語をつくりたかったのだろう。その思いの通りの映画ができあがった。

ここでのフィガロは、若者にも思いがけない形で与えられ、その彼を少女のところへ運ぶ役割を果した。映画の最後に、ドニは二人の背後の道を進び去られるフィガロを見せている。フィガロの顔は「ブルース・ブラザース」の最後で役目を終えたブルースモビルがそうだったように誇らし気に見える。

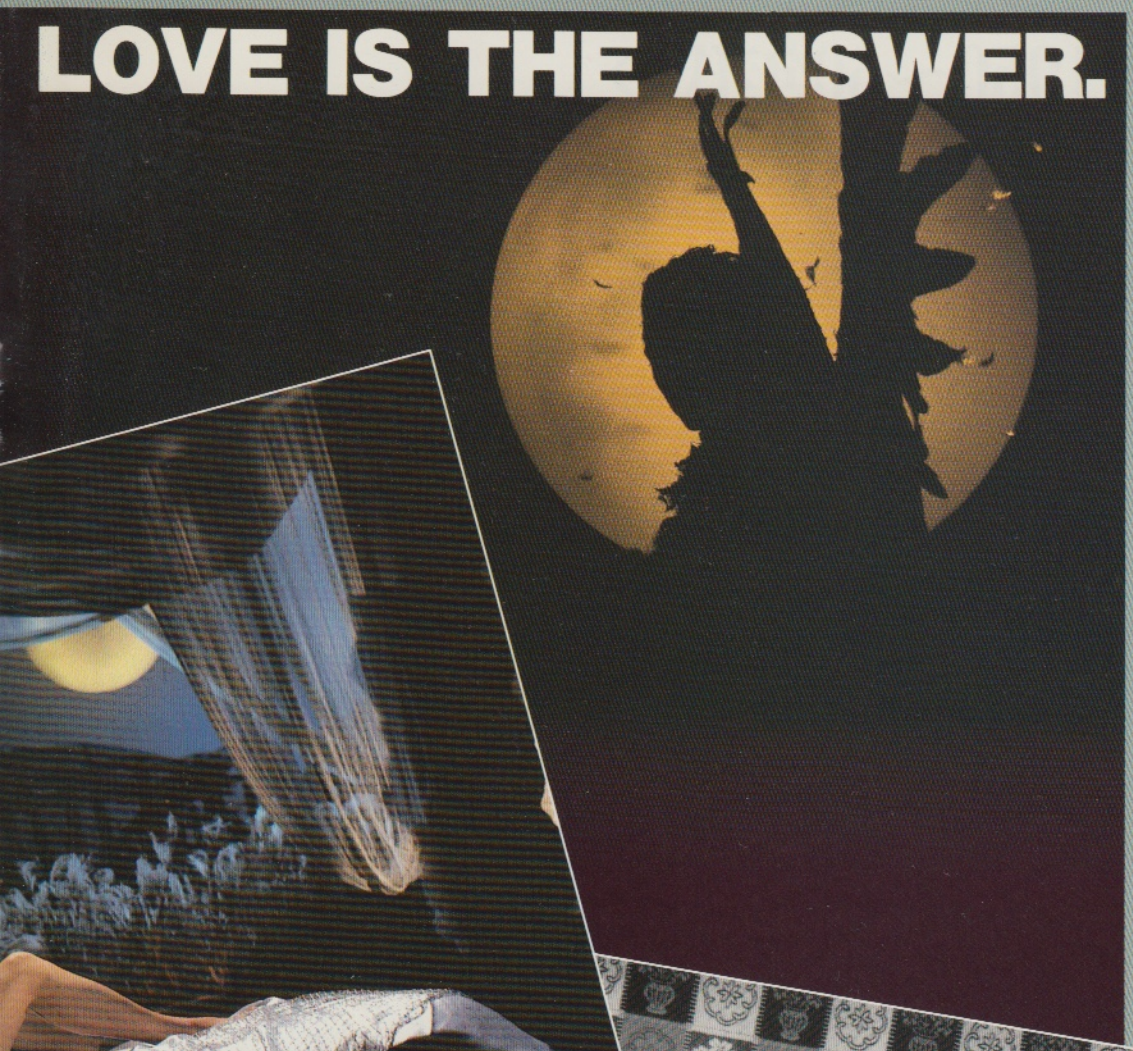


TOKYO NOUVELLE VAGUE

FIGARO STORY

1991 PARIS, TOKYO, NEW YORK AN OMNIBUS FILM

LOVE IS THE ANSWER.



1950〜60年代の映画と車の幸福な関係。

●鈴木布美子

映画に最もよく登場する乗り物といえば、それはまずクルマ以外に考えられない。いつの時代にも、その時代の文化や風俗の香りをたっぷりと含んだ映画があるものだが、そこに登場するクルマたちがいちばん美しく輝いて見えたのは、やはり1950年代から60年代のフィルムではないだろうか。

例えば、アルフレッド・ヒッチコックの映画を思い浮かべてみると、そこに数多くのクルマの名場面があったことに気づくはずだ。キム・ノヴァクが優美なブリティッシュ・グリーンのジャガーに乗ってサンフランシスコの街を走る『めまい』。『泥棒成金』では、ケイリー・グラントがグレース・ケリーの運転するオープンカーに乗って別荘の下見に出かける。ふたりを追跡する警察のクルマをふりきるグレース・ケリーのお転婆なドライビングに、ケイリー・グラントが顔を青ざめる場面もヒッチコックらしいが、(グラントは『汚名』でも、イングリット・バーグマンの酔っ払い運転に冷汗をかいた)、そのあとでふたりが車内で交わす会話も洒落ている。リビエラの海岸を見下ろす山の中腹にクルマが停まり、豪華な皮張りのシートはふたりだけのロマンチックなソファーに一変する。こんな状況で、それもプロポーション抜群のブロンドの美女にいきなり、「胸にする？それとも脚？」と言われて、ドキッとする男性は、なにもケイリー・グラントだけではないだろう。もっとも彼女が言いたかったのは、持参したランチのチキンのことだ。プレイボーイ風の中年男と好奇心旺盛な若い娘を高級車という密室に入れたら、観客がそこで何を期待するか？基本的に性格の悪いヒッチコックは、エロチックな《ほのめかし》の効果をニヤニヤしながら考えていたに違いない。

フランス映画に登場した魅力的なクルマといえば、ルイ・マルの『死刑台のエレベーター』が思い浮かぶ。モーリス・ロネが乗っていた、電動のルーフ着きのスポーツカー。忽然と姿を消した恋人に困惑し、彼の愛車を捜し求めて夜のパリをさまよい歩くジャンヌ・

モローの姿が印象的だ。そして彼のクルマを盗んだ若いカップルとモーテルで出会い、事件に巻き込まれるドイツ人夫妻。彼らが乗っていたのは、当時のドイツが誇る最高級車のメルセデス・ベンツ300SLだった。特徴的なガルウィング・スタイルのドアを開けて運転席を覗き込む若者の姿には、クルマ好きのマル自身の姿が重なるように思えてしまう。

こうしたマルのいささかマニアックな自動車へのこだわりは、近作の『五月のミル』でも見られた。1968年の五月革命を背景にしたこの映画では、舞台となる田舎の屋敷に集まってくる人々が乗っているクルマが、実にバラエティ豊かだった。英国の高級車のローバー、シトロエンの2CVとDSという対照的な二台のフランス車、官能的な赤のアルファロメオ・スパイダー、それに長距離運送用の大型トラック。登場人物のキャラクターと所属する階級に合わせて入念かつ趣味的にクルマが選ばれているところが、なんともルイ・マルらしかった。

ヌーヴェル・ヴァーグの映画作家のなかでは、ジャン=リュック・ゴダールもマルに負けないくらいのクルマ好きだ。名高い『勝手にしやがれ』などは、全体がクルマをめぐる映画だといってもいいくらいで、マルセイユでアメリカ人のクルマを盗んでからパリの路上で射殺されるまでに、全部で5台ものクルマを乗り換える。そのなかで目をひくのは、フォードのサンダーバードやキャデラック・エルドラドといったアメリカ車がクローズアップされていることだ。ジーン・セバーグのような美人のアメリカ娘を助手席に乗せ、派手でスポーティなアメリカ車のハンドルを握ること。例えば、その舞台が50年代のアメリカ西海岸だったら、誰も興奮などはしない。それらのクルマは、アメリカの楽天主義を暗示する要素として、広く受け入れられてしまっているからだ。ゴダールの映画が今なお新鮮なのは、そうしたアメリカ的なシンボルとしての美女とクルマを、現実のパリの街並みのなかに投げ込んで見せた点にあるのだ。

写真上・右「勝手にしやがれ」
(フランス映画社提供)
ジャン=リュック・ゴダール監督作品

『勝手にしやがれ』以降、60年代の半ば頃までに撮ったゴダールの映画には、いろいろと魅力的なクルマが登場する。『軽蔑』でブリジット・バルドーとジャック・パランスが乗ったイタリアン・レッドのアルファロメオ2000スパイダー。『気狂いピエロ』では、ジャン=ポール・ベルモンドが赤のプジョー404を運転し、アンナ・カリーナは颯爽とブルーのアルファロメオの運転席に収まった。ゴダールの映画における愛の時代は、彼がスタイリッシュなクルマを好んだ時代でもあるのだ。

こうした映画を通じて、ヒッチコックが、そしてマルやゴダールが魅力的なクルマの姿をスクリーンに登場させることができたのは、物語の背景となる時代が、戦後の自動車デザインの黄金時期だったこととも無関係ではないだろう。かつてのアメリカ車に溢れていた、巨大さへの素朴な憧憬とゆったりした解放感。そしてアルファロメオ・スパイダーに代表されるイタリアのスポーツカーならではの曲線的なフォルムの美しさ。決して機能や性能数値では計ることのできない人間的な魅力が、それらの車からは強く感じられるのだ。

自動車デザイナーの関心が、理想的な空気抵抗値の探求のために流体力学の領域に深く関わるようになるにつれて、クルマのデザインは急速に退屈なものになった。コンピュータによって導き出された理想のボディ形状はくさび形であり、そのフォルムからの逸脱はまったく説得力を欠いたデザインとして排除されてしまった。結果として今の世の中には、メーカーと商品名だけは違うが、デザイン的には大同小異の画一的なクルマが大量に走り回ることになったのである。

こうした時代にあっては、映画のなかに魅力的なクルマを見つけることは難しい。テクノロジーの進歩は、スクリーンのなかに描かれた同時代から、視線の快楽につながるような自動車の姿を一掃してしまったのだ。映画

「五月のミル」
(シネセゾン提供)
ルイ・マル監督作品

「気狂いピエロ」
ジャン=リュック・ゴダール監督作品
(フランス映画社提供)

に登場するクルマは、そのフォルムよりも動きを強調するようになった。71年に『フレンチ・コネクション』でジーン・ハックマンが破天荒なカーチェイスを披露し、『バニシング・ポイント』で主人公の運転するセダンが警察のバリケードに衝突して《消滅》してからは、映画におけるクルマの存在感の優劣は、いかに派手に壊れるかという問題に変質してしまった。もちろん今でも、映画のなかに特異なクルマを発見することは可能だ。けれども『バック・トゥ・ザ・フューチャー』でマイケル・J・フォックスを過去に運ぶ改造デロリアンにしても、『バットマン』に登場した黒一色の不気味なバットモービルにしても、それはもはや自動車と呼ぶよりは、奇形的なテクノロジーの集合体と見なすべきものだろう。

こうして考えてみると、『フィガロ・ストーリー』は、かつては歴然と存在した映画と自動車の蜜月を現代に蘇らせる試みといえるかもしれない。曲線をベースにしたフィガロのスタイルは、まさに今日の主流的な自動車デザインからの逸脱であり、それ故にフォトジェニックな対象と、ロマンチックな物語の舞台装置となる可能性を秘めているのだ。人はともすれば、フランク・キャプラの『感る夜の出来事』で、クローデット・コルベールがスカートの裾から太股をちらりと見せて、道行くクルマを停めて以来、映画のなかの自動車が恋物語の小道具であったことを忘れてしまう。

『フィガロ・ストーリー』は、古き良き映画と恋と自動車のロマンティックな関係についての記憶を反復する機会を与えてくれるはずだ。

「泥棒成金」
アルフレッド・ヒッチコック監督作品
(CICビデオ提供)

「めまい」
アルフレッド・ヒッチコック監督作品
(CICビデオ提供)

パリの妄想、東京の幻想、そしてニューヨークの現実。

「フィガロ・ストーリー」の音楽をめぐって

●河原晶子

今、私たちが〝愛〟について語ろうとする時、私たちは知らず知らずのうちに〝孤独〟について想いをめぐらしている。現代では〝愛〟と〝孤独〟とは同義語なのだ。私たちが誰かを愛していることを実感する時、私たちは同じように〝孤独〟を意識しているのである。そうして〝孤独〟をより強く感じとることで、〝愛〟への想いはより強く、より深くなってゆくのである。

映画『フィガロ・ストーリー』に描かれる三つのお話を観て、私はますますそんな愛の迷宮、パラドックスへと入りこんでゆくような気がした。パリと東京と、そしてニューヨーク。ここで語られる世界の三つの大都会のラヴ・ストーリーの主人公たちも、みんな〝愛〟と同じくらい〝孤独〟と友達だ。「ライブラリー・ラヴ」の青年は、その題名通り書物＝想像力の中でしか女を愛せない。ここでは男と女の愛は大いなる誤解のうえにしか成り立たない。アレハンドロ・アグレスティはそんな愛の孤独を、ある種の犯罪的な匂いを漂よわせたサスペンスとブラック・ユーモアの味つけによって演出してみせる。林海象の「月の人」の少女が体験する〝愛〟もまた、現実から逃避した幻想の世界での〝愛〟でしかない。アレハンドロ・アグレスティと林海象。男性の映画監督たちはなぜかそうして〝愛〟に幻想をしかみようとしないのである。

そんな中でクレール・ドニの「キープ・イット・フォー・ユアセルフ」だけが、現実的日常的な〝愛〟と〝孤独〟を描いている。ディジョンからボーイ・フレンドに逢いにニューヨークにやって来たフランス女性のヒロインは、姿を消してしまったボーイ・フレンドとではなくて、偶然出逢ってしまったスペイン系の男とのあいだに〝愛〟を見つけるのだ。クレール・ドニはそんな少女のニューヨーク体験を懐しいシネマ・ヴェリテ風に追う。アレハンドロ・アグレスティが形而上学的な愛

の世界に、林海象がメルヘン風の愛の世界に逃げ込むのに対して、クレール・ドニだけが愛の不確かさを承知しながらも実体のある恋を描こうとするのである。

パリと東京と、そしてニューヨーク。パリの妄想。東京の幻想。そしてニューヨークの現実。そんな三つのラヴ・ストーリーを、"音楽"というマジックが微妙についたり離れたりしながらつなげてゆく。パリ篇のパウロ・M・ヴァン・ブルーゲ。映画『ルーバ』に続いてアグレスティと組んだ彼は、巧みに声をコラージュしながら、奇妙なサスペンス感覚で現実と幻想のすきまを音で埋めてゆく。東京篇の浦山秀彦と熊谷陽子。林海象作品ですでにおなじみの二人もまた、サーカス・ミュージックを色どりに、ファンタジックなイメージを高めている。

そしてニューヨーク篇のジョン・ルーリー。パリ篇と東京篇が愛の幻想のサウンド・コラージュによって演出されているのに対して、ここでもニューヨーク篇は即興風ジャズやジャンク・ミュージック、あるいはバッハのコラール風のチェロによって、あくまでも現実としての音をとり込んでいるのが面白い。クレール・ドニはデビュー作『ショコラ』でダラー・ブラントに音楽を依頼していたが、今度の彼女とジョン・ルーリーの組合わせは、このニューヨーク篇に特別出演しているサラ・ドライヴァーやジム・スタークというジム・ジャームッシュ組の映画人たちを仲介にして心地よく調和しているのである。それにしても、ニューヨーク篇が終った後も聴こえ続ける、まるでトム・ウェイツばりのヴォーカルとハーモニカの主はやっぱりジョン・ルーリーなのだろうか？

フィガロ・ストーリーを彩る不思議な妖精たち。

●佐藤友紀

ジャック・リベット、フリッツ・ラング……。衣笠貞之助に、そうそうビットリオ・デ・シーカも！これらの大先輩を敬愛してやまない3人の若い映像作家たちが、それぞれの個性をスクリーンに焼きつけた『フィガロ・ストーリー』。一応、3本の作品を貫くテーマは用意されているが、まずはそんなことすら忘れ、三種三様の夢世界に漂った方が絶対得だ。特に各々強い印象を与える3人のヒロインの魅力を存分に味わいながら。

まずはアレハンドロ・アグレスティ監督のパリ篇「ライブラリー・ラヴ」。

灯りがまるで光る木立ちのようにともった夜の図書館。男は女の背中をただ見つめている。黄色いスーツを小粋に着こなした彼女は華やかすぎて明らかに場違いな感じがするけれど、こうして2人っきりになってみるといかにもこの静謐な空間が似合うような気にもなってくる不思議な女。

物語は、この後、彼が彼女をパリの街中、車で追いかけ、ついに知り合うという風に進むが、女を演じるヘリー・ポーヴェンはアグレスティ監督からとんでもなく難しい要求をされ、それに見事に応えている点を見逃さないでほしい。つまり、食と排泄。この人間にとって根源的な生活の匂いが充満する行為を演じながら、なおかつ生活感のない女を演じろ、と。カフェのトイレでペーパーがないことに気づいた彼女は、長い脚を包んでいた黒いストッキングで事を済ませるのだが、それでもまだエレガントだし、ミステリアス。もちろんコミカルなスパイスは利いているけれども。

アルゼンチン出身のアグレスティ監督の撮るパリの街並は、このユニークな視点に拠るからだろうか。いつもとは違ってとても新鮮だ。ほとんどナレーションで展開されるストーリー、ことにラストのちょっぴりシニカルでユーモラスなやりとりまで、私たちも架空の車に乗ったつもりで追いかけていこう。

林海象監督の東京篇「月の人」も、見慣れたはずの東京を私たちの知らなかった角度か

ら見せてくれている。

『白鳥の湖』の悪魔ロットバルトのような立派なくちばしと羽を持つ“月の人”。彼が都会でひとり暮らしている女のもとに降り立つシーンはやはりけっこうセクシーだ。ロットバルトの連想があながち外れていなかった証拠に、彼(?)と彼女のラブ・シーンは、なんとダンスで描かれている。この場面のヒロイン堂野雅子こそ、林海象が求めたはずの、ある種の無機質さと豊かなエモーションをあわせ持つ女優、という条件に合うのだ。

無機質で硬いだけなら、ファンタジーはすっかり浮いてしまうし、過剰な感情表現はファンタジー自体を台無しにしてしまう。少女時代のヒロインを演じた子役の女の子も含め彼女くらいのバランスが最もアリス役にふさわしい。そう、不思議な月の東京のアリス、である。

今夜も青白い光りの中、大きな卵を愛おしそうに抱いている女の子がいる、と思っただけでもほんわかして。たぶん、それでいいのではと勝手に思っている。

唯一の白黒映画は、クレール・ドニ監督が担当するニューヨーク篇『キープ・イット・フォー・ユアセルフ』。この白黒の画面はカラーより豊かで深い。

ジム・ジャームッシュの素敵なパートナー、サラ・ドライヴァーが出演していることでもわかるように、このエピソードにはジャームッシュやアキ・カウリスマキの世界にも通じる表向きの乾いた無表情さがある。が、それはあくまでも外側のたたずまいだけのこと。見知らぬニューヨークでとまどいながら自分探しに向き合わされたフランス女を演じたソフィー・シモンにしても、その目には孤独、愛、etc. といろんな感情が浮かんでは消えているのだ。

もちろん十分お洒落な作品だけど、決してそれだけじゃない部分が実は一番のおいしさ。あなたはちゃんと感じられるだろうか？

プロダクション・ノート
それぞれの現場のそれぞれの事情

■パリ篇■
ライブラリー・ラヴ
アレハンドロ・アグレスティ監督作品

§異邦人の見たパリを、というカサンダーの意向を生かし、過去4作品でコンビを組んだアルゼンチン出身のアグレスティが選ばれた。25歳の時から年に1本のペースで撮り続けていて、いま最も脂の乗った弱冠30歳の監督だ。映画において一番大切なのはカメラであると主張する彼は、自らカメラを回している。

§3篇とも同じ予算と時間で仕上げるという規則が課せられた。2週間という短い撮影期間を効率よく進めるために、気心の知れたアグレスティ組常連のスタッフ、キャストが集められた。前作『ルーバ』でそれぞれスタッフ、エキストラとして参加したエグベールとヘリーが主役を演じた。他の2篇に負けないゾという気合いの入った現場だった。

§撮影は90年11月26日深夜、オランダのロッテルダムにあるカフェテアトル「シュレマー」でクランク・イン。室内シーンはパン屋と図書館を除き、全てアムステルダムとロッテルダムで撮影された。アムスにはアグレスティの知人が多く、市の病院の一室をアトリエに改装したものを、少女の住む部屋のシーンのために提供してくれたアーチストもいた。

§12月3日からパリ分の撮影を開始。スタッフは列車組と自動車組とに食糧持参で分乗し、ピクニック気分でパリへ向かった。パリではソルボンヌの図書館と、街を走るフィガロを撮影。ほとんどが夜のシーンで、ホロ酔いの野次馬や野次車を追い払うのが、助監督たちの一番の仕事だった。

§スタッフは9ヶ国からの多国籍編成で、現場では4ヶ国語(英、仏、西、蘭)が飛びかった。オランダの法律に従った契約では、撮影終了後12時間は仕事をさせることができない。しかし、アグレスティ組の結束は固く、他2篇に対するライバル意識から大ハッスル。連日深夜に及ぶ撮影を和気あいあいとこなしていった。

■東京篇■
月の人
林海象監督作品

§数年前に来日した時に『二十世紀少年読本』を観ていたプロデューサーのカサンダーは"フィガロ・ストーリー"の東京篇には是非KAIZOをと即決した。林自身がずっと温めていたアイデアをもとに、東京篇はスムーズに走り出した。N.Y.篇がモノクロになったため、カラーでも黒が深く出るフジ64Dフィルムを使用し、モノクロの雰囲気を持つカラー作品(ブラック&カラー)でいくことに決定。

§なるべくにおいのない役者でという林の希望もあり〝女〟役には映画初挑戦の堂野雅子に決定。月の人役の修健は林組の常連で、初の主役に抜擢された。鍛えられた肉体に東洋的な顔立ちで、セリフ無しの映像詩を支えている。

§浅草、東京タワー、新宿など都内20余ヶ所でロケを敢行。天候にも恵まれ、1日で3～4ヶ所を移動する日も。90年12月11日にクランクイン、長田カメラマンによる実景のイメージショットの撮影で始まり、18日までで屋外ロケを完了。19日からにっかつ撮影所でセットイン。木村威夫のアイデアによる、布を多用した変幻自在なセット作りはスタッフたちの間でも驚きの声がもれた。

§月の人が地球の女と出逢うという特撮向きの話を、特撮なしのライヴで撮るのが今回の挑戦であった。目的に応じて3体作成された翼をつけた修健は、高層ビル街を翔ぶシーンでクレーンにつかまり陸橋の上でふり回されるわ、大気圏に突入するシーンであめガラスを頭で割らさせられるわの大災難。いわく「中国人いじめないで……」

§月の人と女のラヴシーンはダンスで表現される。振り付けは、修健の友人で中国の舞踊家の范旅。レッスンは1ヶ月に渡って行われセリフがない分、感情のこもったダンスが出来上がった。待ち疲れてやせた幸薄い背中に翼が生える――林の期待するイメージにこたえる雅子の背中が、ほんのりとエロスを光らせるシーンだ。

■ニューヨーク篇■

キープ・イット・フォー・ユアセルフ

クレール・ドニ監督作品

§『パリ、テキサス』でヴェンダースの助監督をつとめたこともあるドニは、インディーズ系のアメリカ人スタッフたちと親しく、ニューヨークを庭のように熟知している。ロッテルダム映画祭で出逢って以来の友人カサンダーからの依頼ということもあり、ニューヨーク篇の監督に起用された。

§ドニはソフィー・シモンを『モナ・エ・モア』（P・グランペレ監督、日本未公開）で観て目をつけ、いつか組んでみようと思っていた。ドニの気持ちに答えて、パリの舞台の仕事の予定を変更して単身、アニエスbの衣裳を抱えてケネディ空港に降りたった。少年役のE.Jもドニの希望でシカゴの舞台に立っているところをスカウト。シカゴとかけもちで撮影を強行した。

§クランクインは91年1月12日の予定だったが、特殊なモノクロ撮影のため15日に延期。不幸にも湾岸戦争前夜で、フィガロを荷揚げする港のシーンを撮影する予定が、軍用に港を使うことになったためロケが不可能になった。急遽ストーリーを変更、ロケ地を捜して東奔西走。車を盗むという設定にして、やっとのことでダウンタウンに格好のパーキングを発見し、スタッフ一同胸をなでおろした。

§メインスタッフはフランス人、周りを固めるのがインディーズ系のニューヨーカーたち。英語でコミュニケートは行うが、思考やシステムがお互いに違うための困難さもあった。そんななかでひょうひょうとした存在のジム・スターク（隣人役で出演、ジャームッシュ作品のプロデューサーとしても有名）がときにぎこちない現場をやわらける役目を果たした。

§50年代ヌーベルバーグ風のモノクロにこだわるドニ。その味を出すための特殊な現像はパリでしかできないため、撮影フィルムをパリへ送り、現像後N.Y.へラッシュプリントを返送することになっていた。しかし湾岸戦争の影響で、空輸貨物は全て開封されてしまうという情報を得て、パリへの輸送は中止。結局ラッシュ試写が一度も行われないままでクランクアップ、ドニ自身が手荷物として撮影済みフィルムをパリへ持ち帰った。

（構成・まつかわゆま）

もっと楽しく 感じるままに―技術の日産

NISSAN

シートベルトをしめましょう。

パリ:シャンゼリゼ

東京:花園神社

パリ:アンヴァリッド

東京:とげぬき地蔵通り

日産の新し

FIG

東京ヌー

フィガロは、東京の文化を遊ぶフルオープントップの2+2。バイクカー待望の第3弾です。全国で2万台の限定販売です。お申し込み

●全長3740mm・全幅1630mm・全高1365mm・エンジンMA10ET・最

スピードおさえて、いい運転。

恋愛のために生きる。フィガロ

ニューヨーク タイムズスク

ニューヨーク イースト・ビレッジ

い波、誕生。

ARO

ベルバーグ

8月末まで3回に分けて受付け、抽選で販売させていただきます。お申し込み・お問い合わせは、お近くの日産販売会社までどうぞ。
出力(ネット)76PS/6000rpm・最大トルク(ネット)10.8kgm/4400rpm

Feel the Beat